

令和 5 年 7 月 21 日

文教厚生常任委員会

委員長 綾城 美佳 様

文教厚生常任委員 ひさなが 信也

文教厚生常任委員会行政視察報告書

下記の日程で行政視察を実施しましたので、別紙のとおり報告します。

記

1. 視察期日及び視察先

令和 5 年 7 月 11 日（火） 北九州子どもの村小・中学校（学校法人きのくに子どもの村学園）
「公教育のあり方について」

2. 視察参加名簿

委員長	綾城 美佳
副委員長	米弥 又由
委員	林 哲也
委員	岩藤 睦子
委員	中平 裕二
委員	上田 啓二
委員	江原 健二
委員	ひさなが 信也

以上 8 名

3. 視察報告・所感 別紙

(別紙)

視察先	北九州子どもの村小・中学校（学校法人きのくに子どもの村学園）			
視察日時	令和 5 年 7 月 11 日 10：30～12：00			
視察項目	公教育のあり方について			
対応部署名				
学校概要				
	北九州子どもの村小学校 2006 年 4 月開校 2009 年 4 月校名変更 2016 年 4 月法人合併 北九州子どもの村中学校 2011 年 4 月開校 定員：1 学年 12 名			
視察内容				
○教育目標 「自由な子ども」私たちは、どの子にもどの子にも、感情、知性、人間関係のいずれの面でも自由な子ども、つまり次のような子どもに育てほしいと願っています。 ■感情面の自由 無意識の中に秘められた不安、緊張、自己否定感などから解放され、情緒が生き生きと躍動すると同時に、自己意識がしっかりしていて、しかも自身と自己肯定感をもって生きる子になって欲しい。 ■知性の自由 既成の知識や技術を受け身的に習得するのではなく、生活の中から見つけた具体的な課題に取り組み、知識や技術を想像する体験を積み重ねて、知的探求の態度と力を伸ばして欲しい。 ■人間関係の自由 徳目主義の上からの道徳教育によってではなく、心理的に自立した個人として、みんなと目標を共有し、役割を分担して問題を解決する体験に参加して、共に生きる喜びを味わい、人間関係の術を学んで欲しい。 ○基本方針 ■自己決定の原則 ▶子どもがいろんなことを決めます。 学習計画や行事の立案が子どもと大人の話し合いで決まります。自分の入るクラスが選べます。クラスミーティング、寮のミーティング、そして全校集会など話し合いのとても多い学校です。 ■個性化の原則 ▶一人ひとりの違いや興味が大事にされます。 個性や個人差を尊重します。年齢が同じだからといって、同じことを同じ方法で、同じペースで、同じ答えに向かって学習するものではありません。広い範囲のさまざまな学習や活動が選べます。 ■体験学習の原則 ▶本やドリルの勉強よりも、実際に作ったり調べたりする活動が重視され、「プロジェクト」と呼ばれて時間割の半分を占めています。クラスはプロジェクトのテーマによってつくられ、子どもは好きなところを選んで所属します。 ○授業について ■プロジェクト 3つの原則が調和的に実行される形態です。 たんなる教科の寄せ集めではありません。有名な教育学者デューイの提唱した「活動的な仕事」に当たります。小学校は週 14 時間、中学校では週 11 時間です。（きのくに子どもの村小中学校） ■自由選択・ミーティング 個別活動よりもグループ活動が中心の時間です。スポーツ、図工、音楽、英会話など、たくさんのメニューから 1 学期ごとに選びます。小学校は週 3 回、計 6 時間、中学校は週 2 回、計 3 時間。				

ミーティングは、週1回の全校集会のほかに、クラスのミーティングや全寮ミーティングなどが折りにふれて開かれます。犬委員会や遠足委員会などの仕事もあります。ミーティングは自由学校の成否を左右するカギです。

以上のことはパンフレットに記載されているままであり、事前に読んだうえで視察に臨んだ。

視察の前半は北九州子どもの村中学校 高木秀美校長先生から学園の考え方や方針について話を伺った。文章を読んでも、話を伺っても、「こうあるべきだ」「こうなってほしい」という理想への熱意を感じた。しかし、これまで私自身の小中学校での経験とは違いがありすぎて、実際に子ども達がどのような生活や学びをしているのか想像がつかなかった。

校長先生は「この学校には教科がない、学年がない、先生と呼ばれる人がいない、宿題がない、テストがない、チャイムがない。」と言われた。私たちにとって、あつて当然だったものがない学校というのはどういうものなのか。話を伺った後、実際に校舎を見学する中で、子どもたちが本当に生き生きと能動的に活動している姿を目の当たりにした。



小学校プロジェクト「いきもの&クラフト」

学年を問わず約 10 名の生徒が 1 つの教室で活動をしていた。

ここで一番驚いたのは、中学年か低学年の男の子たちがパソコンを囲んで作業をし、その姿がとても自然だったことである。先生に、操作は誰かが教えるのかと質問すると、「彼らが彼らにとって必要な操作を聞き

に来る」と答えが返ってきた。決まったことを一方的に教えるのではなく、その瞬間に子どもが必要なことを子ども自ら学ぼうとする環境があり、子ども達がそれを当たり前としていることが素晴らしいと感じた。



小学校プロジェクト「ひらおだいファーム」

ここでは、これから行う作業についてグループでミーティングをしていた。

ある作業をだれがするかという内容を話していたが、ここで驚いたのは「その作業は〇〇君がやりたがってたんじゃない」というこえが子どもからあがり、自分の事だけでなく相手のことや周囲のことを気にかけている優しさが伺えた。また、違う業務ではやりたいという声が上がらないなかで「なら僕がやろうか」という声が聞こえた。やりたいことだけをやるのではなく、チームとして必要な役割をそれぞれが考えていた。



中学校プロジェクト「テアトル平尾台」

ここでは大人がいない教室で、子ども達だけで話し合っていた。

遠くからだったので内容まで聞き取ることができなかったが、眼差しは真剣そのものだった。



この工具は教室のそばの棚に置かれている。
のこぎりもドリルも子どもの手の届く場所にある。
最近では「危険性があるもの」を子どもから遠ざける傾向にある。
しかし、ここでは、この道具の本来の使い方や危なさを子ども達自身が知っているからこそ、このように誰

もが必要な時に使用できる環境がつかれるのだと驚いた。

他にも、ベランダで太陽に当たりながら展示物を製作する子ども達や、飼っているポニーの橋を作ろうとする子ども達のはつらつを目的に向かって子ども達同士で話し合いながら行動している場面を見かけた。

寮内の生活等も気になったが、今回の視察で見学できたのはここまでだった。

所 感

「教科がない、学年がない、先生と呼ばれる人がいない、宿題がない、テストがない、チャイムがない。」一般的な小中学校にあるものがない。しかし、子ども達は皆生き生きと活動し、自ら学んでいる。これまで自らが経験してきた「教育」とは違うものを実際に目にすることができ、貴重な視察となった。私立だからできるという意見もあるが、子どもの可能性を最大限伸ばすことや、自己肯定感の醸成は、公立であろうと私立であろうと関係がないものだと考える。今回の視察で学んだことを、長門市における公教育とどう結びつけるかが重要である。きのくに子どもの村学園の考え方や手法を一部取り入れている地方自治体もあると伺っている。どの部分を、どういった目的を持って、どのように落とし込むかということについて今後さらに知見を深め、提言できるようにしていかなければならない。